江戸日本的古文辞学与四书注释

赵熠玮 / 著

南開大學出版社

江户日本的古文辞学与四书注释

赵熠玮　著

南開大學出版社
天　津

图书在版编目(CIP)数据

江户日本的古文辞学与四书注释 / 赵熠玮著. —天津：南开大学出版社，2019.4
ISBN 978-7-310-05786-3

Ⅰ. ①江… Ⅱ. ①赵… Ⅲ. ①四书—注释—研究—日本—江户时代 Ⅳ. ①B222.1

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2019)第 069355 号

版权所有　侵权必究

南开大学出版社出版发行
出版人：刘运峰
地址：天津市南开区卫津路 94 号　　邮政编码：300071
营销部电话：(022)23508339　23500755
营销部传真：(022)23508542　　邮购部电话：(022)23502200
*
北京建宏印刷有限公司印刷
全国各地新华书店经销
*
2019 年 4 月第 1 版　　2019 年 4 月第 1 次印刷
230×155 毫米　16 开本　11.25 印张　2 插页　148 千字
定价：39.00 元

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022)23507125

代序——负笈东瀛修国学

赵熠玮是我熟知的青年学者。他素喜哲思，南京大学毕业后，虽在知名外企工作，但仍觉自己学养不足，毅然于2010年辞职渡日深造。此后师从日本当代著名儒学者佐藤錬太郎教授攻读博士学位，研究日本古学派著述至今。虽然年纪尚轻，他在日本哲学界已经崭露头角，论文数次被日本论说资料保存会收录。可以说，在传承日本传统思想上，得到了一定认可。

本书的核心观点是，荻生徂徕《论语征》《大学解》《中庸解》《孟子识》在其形而下的基调下将四书注释为宣扬先王之道的政治方略。荻生徂徕是日本古学派的代表人物，也是日本代表性的思想家，其著述众多，涉及思想、政治、语言、文学、经济学等诸多分野。荻生徂徕对日本儒学的影响为最盛，其完整地做出了对朱熹四书的重新诠释。

荻生徂徕所在的江户时代中期，是日本前工业经济蓬勃发展、产业细分化、传统庶民文化在精细的社会分工下趋于洗练与极致的阶段。荻生徂徕举着反朱子学的旗帜，求的是治国之方略，并且在事实上推动了幕府诸政策的拟定与实施。在吸取朱子学营养并进行合时宜、重实践的改造这一点上，与我研究的阳明学的基本精神是一致的。

荻生徂徕以古文辞学为利器，掀起了反儒学的一次“文艺复兴”浪潮，对整个日本思想史的走向有着十分巨大的影响。徂徕所谓古文辞学是指通过对古汉语实证性的研究而理解经书的原意，认为想要理解唐虞三代的思想，就必须精通古代汉语的字义与文理。随着

时代的发展，语言本身也会改变。而语言的变化直接会影响“道”的传达。想要理解古时之道，就不得不了解古代的语言。对于后人而言，历史是基于语言文辞而得以传承的，对语言文字的曲解则直接造成了对历史真实的曲解。本书从性说、本体论、理气论、道德论等朱子学经典话题宏观展示了建立在古文辞学基础上的四书注释。

研究古文辞学不仅需要深厚的古文功底，还要求研究者具备解读日语汉文文献的训读功夫。赵熠玮在日本接受了专业的汉文训读训练，在此基础上对荻生徂徕的学说做了详尽的爬梳，并制作了可资反复检索、下载的数据库，对学界作出了一定贡献。

今天，我们讲东方价值的树立，离不开对儒学在汉字文化圈诸国的本土化研究，而本土化研究需要更加细致、具体的外部视角。赵熠玮作为具有足够儒学学养，踏实接受了国外系统训练的学者，是给我们提供这一观察视角的合适人选。

大风起于青萍之末，我很高兴看到赵熠玮的这本专著在国内学界出版，也希望这能在一定程度上更加繁荣我们的国学研究。

赣南师范大学国学院院长
周建华

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序　言

荻生徂徠（一六六六～一七二八年）、名は雙松（なべまつ）、字は茂卿（もうけい、一説はしげのり）、徂徠と號し、江戸中期の思想史に莫大な影響を與えた思想家、文獻學者、語學者である。特に儒學における業績が大きく、幕府最盛期に伊藤仁齋（一六二七～一七〇五年）と竝稱され、古學派の集大成者である。徂徠は寛文六年（一六六六年）江戸に生まれ、幼くして學問に優れ、林家の林春齋（一六一八～一六八〇年）、林鳳岡（一六四四～一七三二年）に師事した經歴がある。しかし、延寶七年（一六七九年）、將軍の侍醫だった父親の流罪に伴い、十四歳にして上總國長柄郡本納村に蟄居した。そこで漢籍、和書、佛典を十三年余り獨學し、後の學問の基礎を作ったとされる。元祿五年（一六九二年）、父の赦免で共に江戸に戻り、更に學問に專念し、芝増上寺の近くに塾を開いた。元祿九年（一六九六年）、將軍德川綱吉の側近であった柳澤吉保によって拔擢され、吉保の領地川越で十五人扶持を支給され吉保（一六五八～一七一四年）に仕えた[①]。後に柳澤邸で講學し、將軍綱吉の知己を得て、政治の諮問に應える立場になった。寶永六年（一七〇九年）、將軍綱吉の死去に伴い、柳澤吉保が失脚した。徂徠は柳澤邸を出て、日本橋茅場町に居を移し、護園塾を開いた。多くの弟子を擁し、やがて護園學派（徂徠學派、または古文辭学

① 徂徠自筆の「由緒書」によると、「元祿九子年八月廿二日、學術を以、出羽守へ被抱、拾五人扶持受領付」。

派）とも呼ばれるようになった。享保七年（一七二二年）、將軍吉宗の信任を得て、再び幕府の中樞に入った。享保十三年（一七二八年）に死去した。亡くなった後も、高弟太宰春臺、服南郭、山縣周南などを通じて日本の思想史に影響が續いた。特に太宰春臺は儒學の造詣が深く、賀茂眞淵や本居宣長などの國學者にも影響を與えたとされる。

徂徠は儒學をはじめ、語學、漢詩など多くの作品を殘した。儒學においては、『讀荀子』『蘐園隨筆』『蘐園十筆』などの隨筆に、『論語徵』『中庸解』『大學解』などの注釋書、『辨道』『辨名』などの語彙解釋書がある。これらの儒學書について、たくさんの先行研究がなされてきた。

戰後日本の徂徠思想研究の發端は丸山眞男氏の『日本政治思想史』である。丸山氏は徂徠學における、朱子學による「自然」と「作為」の混同を分離に導くことを「近代性」と指摘している。その後の研究にこの論説の濃い影が宿られている①。その同時に、徂徠研究を展開するのが吉川幸次郎である。丸山、吉川兩氏が重要視しているのが徂徠學の核心思想である「道論」である。徂徠の「道論」を檢討するためにまず避けて通れない問題は「道」とは何かという命題である。この問題に關して、尾藤正英が「國家主義の祖型としての荻生徂徠」（『日本の名著』十六、中央公論社、一九七四年）において、禮樂刑政をして禮樂刑政たらしめるものが道であるとし、いわゆる禮樂制作の原理に道を求める説を打ち出した。一方、植手通有が「江戸時代の歷史意識」（『日本近代思想の形成』、岩波書店、一九七四年）において、聖人の道としての普遍性を持つのは先王がその時代その國の事情に應じて禮樂を作る制度化の精神であると指摘している。平石直昭が「戰中・戰後徂徠論批判」（『社會科學研究』39（1-3）、東京大學、一九八七年）

① 詳しくは田原嗣郎『徂徠學の世界』（東京大學出版會、二〇一〇年）序章を參考されたい。

において、異論を唱えたが、制度制作という先王の主體的精神に道があるという點では植手氏と一致している。ただ、これらの研究には類似點がある。それは荻生徂徠を朱子學の批判者として扱っている傾向である。一方、今中寛司氏『徂徠學の基礎的研究』(吉川弘文館、一九六六年)、田原嗣郎氏『徂徠學の世界』(東京大學出版會、二〇一〇年)、田尻祐一郎氏『荻生徂徠』(明德出版社、二〇〇八年) などの研究によると、『蘐園隨筆』執筆段階の徂徠は丸山氏が主張している朱子學批判者よりも仁齋學批判者と言えるという。これらの研究が正しければ、徂徠は若き頃、林家に入門し、朱子學を習い、中年期以降、朱子學の批判者となったということになる。本研究の目的は徂徠による朱子學批判の全貌を描き、徂徠學と朱子學の對立概念を明らかにすることにある。したがって、本研究は朱子學の經典である「四書」(即ち『論語』『孟子』『中庸』『大學』) の注釋書に限定し、朱子の『四書章句集注』と徂徠の『論語徵』『中庸解』『大學解』[①]をそれぞれ比較とする。徂徠の四書注釋研究を通じて、いわゆる古文辭學と徂徠四書思想の関連性を明らかにしたい。

① 徂徠の『孟子』に對する注釋書である『孟子識』は未完成のため、本研究の對象外とする。

凡　例

本論文に引用された荻生徂徠の著作の底本は次の通りである。

『辨道』

『日本思想大系・36 荻生徂徠』（岩波書店、一九七三年）

『辨名』

『日本思想大系・36 荻生徂徠』（岩波書店、一九七三年）

『學則』

『日本思想大系・36 荻生徂徠』（岩波書店、一九七三年）

『論語徵』

『荻生徂徠全集』第三巻、第四巻（みすず書房、一九七七年）

『中庸解』

『日本名家四書注釋全書』學庸部（東洋圖書刊行會、一九二二年）

『大學解』

『日本名家四書注釋全書』學庸部（東洋圖書刊行會、一九二二年）

『蘐園隨筆』

『荻生徂徠全集』第十七巻（みすず書房、一九七六年）

『徂徠先生答問書』

『荻生徂徠全集』第一巻（みすず書房、一九七三年）

本論文に引用された朱子及び伊藤仁齋の著作の底本は次の通りである。

『四書章句集注』（朱熹）

『新編諸子集成・四書章句集注』（北京・中華書局、二〇一一年）

『中庸發揮』（伊藤仁齋）

『日本名家四書注釋全書』學庸部（東洋圖書刊行會、一九二二年）

『大學定本』（伊藤仁齋）

『日本名家四書注釋全書』學庸部（東洋圖書刊行會、一九二二年）

目　次

凡　例 ……1

第一章　朱子學批判への轉換 ……1
　第一節　『護園隨筆』の成立 ……2
　第二節　朱子學における「理氣論」 ……4
　第三節　伊藤仁齋の理氣思想 ……7
　第四節　『護園隨筆』に見える仁齋學批判 ……18
　第五節　まとめ ……32
第二章　方法論としての古文辭學 ……33
　第一節　問題意識と考察の範圍 ……34
　第二節　古言、古語に關する内容の分布 ……35
　第三節　古言、古語に關する出典の確認 ……37
　第四節　殘された問題點 ……57
　第五節　まとめ ……60
第三章　『論語徵』 ……62
　第一節　『論語』の位置付けと「聖人觀」 ……63
　第二節　先王の道 ……68
　第三節　德 ……85
　第四節　まとめ ……90
第四章　『中庸解』 ……92
　第一節　徂徠の「中庸觀」 ……93
　第二節　『中庸』首章の解釋 ……95

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第三節　『中庸解』における「誠」……106
第四節　君子小人論……117
第五節　まとめ……122
第五章　『大學解』……124
第一節　「大學」について……124
第二節　「三綱領」について……130
第三節　「八條目」について……140
第四節　まとめ……154
終　章……155

参考資料……161
后　记……167

第一章　朱子學批判への轉換

吉川幸次郎氏の『徂徠學案』や辻達也氏の『荻生徂徠年譜』などの史的研究に示されているように、徂徠の人生は幾つもの挫折を經驗しており、これらの挫折の影響を受け、徂徠の學術も人生も大きく變化したことが見受けられる[①]。徂徠は幼少に上總へ流罪となった父に伴われ、後に增上寺で困窮な生活を送っている。その頃には既に朱子學などを學んでいた[②]。しかし、一七一一年に出版された『譯文筌蹄』を見ると、徂徠の關心がまだ言語にあったことがわかる[③]。儒學に關する自らの考えをまとめた書物『護園隨筆』が刊行されたのは一七一四年である。その一年後、夫人の佐々氏が亡くなってから、著書に專念し、一七一七年、主著の『辨道』『辨名』、及び『學則』を完成した。一七一八年、五十三歲の頃、徂徠の「四書」注釋の集大成である『論語徵』が完成した。これまでの徂徠思想研究は『辨道』『辨名』『論語徵』などに重心を置き、朱子學批判という觀點から展開されているが、『護園隨筆』に關する研究はきわめて少ない。今中寬司など三氏の研究が正しければ、林家に入門し基礎教育を受けて朱子學者だったはずの徂徠がただの數年間でいきなり朱子學批判者になったということに

---

① この點について拙作「徂徠學の「道」についての再考」、『北海道大學文學研究科研究論集』第十三號を參考されたい。

② 吉川幸次郎氏『徂徠學案』による。

③ 荻生徂徠の『讀荀子』は『譯文筌蹄』よりも早い一七〇八年頃に定稿されたという説があるが、『讀荀子』は徂徠が沒三十年後、弟子の宇佐美灊水の手によって出版されたことから、確實な成立年は確定できないため、本論では考慮に入れていない。

なる。そのような大きな變化には必ず理由があると考えられる。『辨道』『辨名』（以下は「二辨」と略）や『論語徵』よりも早く出版された『蘐園隨筆』の研究によって、その學術的變化の經緯が明らかにされると考えられる。本章では、朱子學の重要概念である「理氣」を中心に、『蘐園隨筆』と仁齋學、朱子學との關係を明らかにしたい。

第一節　『蘐園隨筆』の成立

荻生徂徠の人生に二人の人物が大きな影響を與えたとされる。その二人は柳澤吉保と伊藤仁齋である。柳澤吉保からの知遇の恩については既に多様な文學作品や歴史書に描かれているので、贅言せず、伊藤仁齋との關係のみ確認しておく。

伊藤仁齋は江戸前期に活躍していた儒學者である。荻生徂徠より三十九歳年上で、京都で古義堂を開き、「古義學」を提唱した。所謂古義學とは、當時權威を持っていた朱子學の經典解釋を廢し、訓詁などの方法で經典を研究する實證主義的な學問である。また、朱子學に流入した禪學や老莊思想を排除することを目的の一つとしていた。徂徠の青年期は仁齋學の最盛期に當たり、柳澤家に仕えた荻生徂徠はそこで伊藤仁齋の門人である渡邊子固（生卒未詳）と知り合った。子固を介して、徂徠は伊藤仁齋に一通の書簡「與伊仁齋」（『徂徠集』所收）を送った。書簡の中で徂徠は次のように述べている。

> 始め不佞少（わか）くして、南總に在りしとき、則ち已に洛下の諸先生、先生に踰ゆる亡きを聆（き）くなり。心誠に鄉（むか）ふ。後に赦に値（あ）たりて東歸すれば、則ち會（たまたま）一友生新たに洛より來たり。先生の長者たる狀を語り、娓娓として置か弗（ざ）るなり。而して益（ますます）慕

ふ。[1]

徂徠は謙虚な言葉遣いで仁齋に手紙を送った。徂徠のこの手紙に據れば、南總に流罪となったとき、即ち少年時代に、既に仁齋のことを聞いて、慕い始めたという。この手紙は次のように續いている。

> 先生の『大學定本』『語孟字義』の二書を見るに迨(およ)べば、則ち節を擊ちて興りて、以謂(おもへ)らく、先生眞に時流を踰ゆること萬萬なり、と。（中略）茫茫たる海内、豪傑幾何ぞ。一に心に當たる亡し。而して獨り先生に鄕ふ、否(しからず)んば則ちこれを古人中に求むるのみ。亦た曰く、不佞自ら揣らざるの甚だしきなり。先生或ひは能く其の情を思はば、豈に大いに哀憫せざらんや。此れ不佞の左右に神飛するの久しき所以なり。[2]

上に據れば、徂徠が最初に仁齋學に接觸したきっかけは『大學定本』『語孟字義』という二册の本を讀んだことである。朱子學において「初學入德の門」（朱子「大學章句」序）とされる『大學』について、伊藤仁齋が朱子の注釋を批判したのが『大學定本』である。また、『語孟字義』は、伊藤仁齋が『論語』『孟子』という二册の古典に見える重要概念について、自らの見解を述べ、朱子學の解釋を批判した著作である。この二書は仁齋の主著である。徂徠はこれを讀んで、共鳴し、仁齋に手紙を送ったのである。徂徠の著作に、この書簡ほど謙遜した言葉遣いで書かれた書簡は他にないことから見れば、この頃の徂徠は仁齋に對してかなり敬意を持っていたようである。

しかし、伊藤仁齋からの返事がないまま三年が經過する。三年

---

① 『日本思想大系・荻生徂徠』（岩波書店、一九七三年）五二五頁。
② 『日本思想大系・荻生徂徠』（岩波書店、一九七三年）五二六頁。

後（伊藤仁齋の沒後二年）の一七〇七年、『古學先生碣銘行状』という一册の本が刊行された。その本の附録として、荻生徂徠の手紙が徂徠の了承を得ることなしに、「寄伊藤先生書」という題名を付けて收録された。長年慕った仁齋先生に讀んでもらいたい氣持ちを込めて、謙遜して書いた手紙が、徂徠に斷りもなく公刊されたことから、徂徠が驚いて怒ったことは安易に想像できる。この事件をきっかけに、徂徠が仁齋を批判するようになった可能性は否めない。この時期、徂徠は柳澤邸で柳澤夫人に儒學を講義しているが、講義のため、たくさんの學習ノートを用意している。七年後の一七一四年、徂徠は伊藤仁齋の學問を強く批判した書物を公刊した。それがこの時期の學習ノートを集めて整理した『蘐園隨筆』である。『蘐園隨筆』を出版した動機は、既に紹介した「與伊仁齋」と關わりがあると思われるが、もう一つの動機もあると今中寛司氏は指摘している①。それは一刻も速く仁齋學から脱したいと考えており、伊藤仁齋の説に共鳴しながらも、仁齋の朱子學に對する全否定には贊成せず、朱子學に自らの理解を加えて、所謂「徂徠流朱子學」で仁齋と對抗しようとした意圖が見受けられるという。しかし、この時期の徂徠は本當に朱子學修正主義者なのであったか、本稿の主要な着目點はこの時期の徂徠の説と朱子學、仁齋學との對比にある。朱子學において最も重要な概念である「理氣」について、仁齋と徂徠の解釋をそれぞれ確認していこう。

第二節　朱子學における「理氣論」

まずは徂徠の學習對象であり、仁齋と徂徠の「理氣論」の前提となっている朱子學の「理氣論」について簡潔に整理しておきた

① 今中寛司『徂徠學の基礎的研究』（吉川弘文館、一九六六年）に見える。

い。

(一)「理」と「氣」

「理」と「氣」という概念は中國の先秦思想に既に見られるが、宋代に至ってはじめて「理」と「氣」及びその關係について系統的に論じられるようになった。周知のように、朱子學の本體論においては、萬物の成立、存在が「理」と「氣」とによって説明されている。この朱子學的世界觀の原型は周敦頤（一〇一七～一〇七三年）の「太極」と、張載（一〇二〇～一〇七七年）の「太虚」、及び北宋の二程子（明道（一〇三二～一〇八五年）、伊川（一〇三三～一一〇七年））の學説に由來している。朱子學の理氣論については既にたくさんの先行研究が為されているので、本研究において仁齋學と徂徠學と對比するため、「理氣論」に關連している主な論點だけを提示しておく。

まずは次の文言を見てみよう。

> 天地の間、理有り氣有り。理なる者は、形而上の道なり。生物の本なり。氣なる者は、形而下の器なり。生物の具なり。（「答黄道夫一」）

上に據れば、天地には理も氣もあるが、氣はあくまでも形而下の器で、形而上ではない。理は形而上で、萬物の本である。朱子の『太極圖説解』には「太極は形よりして上の道なり。陰陽は形よりして下の器なり」と述べている。朱子が「理」と「氣」を形而上と形而下に二分していることがわかる。

朱子は更に『太極圖説解』で次のように述べている。

> 萬物よりしてこれを觀るときは、即ち萬物各々その性を一にするも、而も萬物は一太極なり。蓋し合はせてこれを言へば、萬物は統體一太極なり。分けてこれを言へば、一物ごとに各々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com